

第 1 回 屋島・讃岐から瀬戸内・西日本へ

平成 25 年 6 月 29 日 (土)

@サンクリスタル高松 3 階 視聴覚ホール

渋谷 啓一 (香川県立ミュージアム)

0 はじめに

1 屋島の地理的位置

(1) 瀬戸内海 5つのポイントと4つの海域 (地図①)

※関門海峡・芸予水道・備讃瀬戸・淡路島・難波／住吉

※備讃瀬戸の持つ意味

(2) 備讃瀬戸 2つの軸線 (地図②)

※屋島・女木島・男木島・豊島・直島・児島の軸線

※屋島は軸線の四国側の拠点

(3) 「古・高松湾」 屋島の位置＝瀬戸内海と高松平野を結ぶポイント

※高松平野→讃岐国最多数の郷 (地図③)

大内 4 寒川 7 三木 8 山田 11 香川 12

阿野 9 鶺足 8 那珂 10 多度 7 三野 7 刈田 6

※陸地化する「古・高松湾」 (史料①)

2 屋島の歴史的位置

☆「遡って見てみる」

(1) 豊臣(羽柴)秀吉の四国攻め (史料②・③)

※侵攻軍の内訳 阿波：羽柴秀長／伊予：毛利輝元、小早川隆景

●讃岐：宇喜多秀家、蜂須賀正勝、黒田孝高、仙石秀久

→腹心の2名が讃岐侵攻に加わっている。

(参考)「北ノ峯ハ分内狭迫ニシテ兵ヲ留ガタキ故ニ南ノ峰ニ移ル、

此山ハ上代ノ名城ナレドモ山高シテ戦ヲナスニ用ナシ。」

(2) 南北朝の動乱期

※細川定禅の挙兵と、高松頼重との戦い（史料④）

「矢島ノ麓ニ打寄テ国中ノ勢ヲ催ス処ニ」

「宇多津ニ於テ兵船ヲ点ジ、備前ノ児島ニ上テ已ニ京都ニ責上ント仕候。」

(3) 源平合戦

※平家はなぜ屋島に拠ったのか

「此屋島の浦は城郭にて候なり」（長門本・南都本『平家物語』）

※一の谷合戦前夜の状況（史料⑤・⑥）

※もう一度、瀬戸内海の海域・ポイントを見てみよう!!

(4) 屋嶋城

※屋島のもつ位置づけ

※天智政権下での位置づけ（史料⑦・⑧）

3 おわりに

于始ナレバ踏落テ然ベシ。高松山ノ松ヲ剪寄セ、カラ堀ヲ埋上サセ、足代ニシテ一時攻メ陷シ國人ノ聽ヲ驚カスベシト下知シ玉ヘバ仙石氏はヲ聞テ、去年我が攻遣タル城ナレバ人手ニハ懸ベカラズトテ攻寄ル、惣軍相爭テ攻具ヲ待ズ取上リ蟻ノ如ク、コレニ附テ死亡多シ、城内ニモ鐵砲百挺バカリアレドモ業スルトモ見ヘズ、敵ニ方餘兵天地ヲ響カセ攻寄ル、堀塹堅固ナレドモ猛勢ニ切所ナケレバ大軍彌ガ上ニ重ナリ何ノ造作モナク乘落シ、二百餘人ノ者ドモ一人モ洩サズ攻殺ス。香西伊賀守ガ居城ヨリ四里ノ行路ナレドモ、海越ニ見ユル所ナレバ此城ノ燧ヲ上タルヲ見テ、城中ノ旗ヲ下シ敵來ラバ降ヲ乞ント用意ス。然ル處黒田孝高山田郡ノ郷人ヲ招キ來シメテ、當國ノコトヲ問シム郷人ガ曰ク、近年國中コト々々土佐方ニ降參シテ殘ル者ナシ。大名ニハ香川信景、香西伊賀守也人數三千ツ、モ持ベケレドモ、近年ノ戰ニ死亡シテ半ニモ及ベカラズ、土佐方ニハ西長尾ノ國吉甚左衛門組與力一千余人、當郡ノ山分植田郷ニ元親新城ノ築キ名代トシテ、長曾我部右兵衛尉ヲ城主トシ。細川源左衛門尉ヲ副將トシテ指置ル、元親ノ扈從與百人凡ソ覺ヘノ十三百人總兵二千五百餘人ヲ込置テ元親ハ阿波ノ大西邑白地ノ城ニ居玉ヒテ、後援ヲナスベキ計ヲヒトコソ承リテ候ト申シカバ左アラバ見分シテ、植田ノ城ヲ攻ベシトテ浮田家ノ兵將五頭五千餘人ヲ相具シテ、孝高見分ノ爲ニ發向ス。其路次ニ由良山ノ城共敵ノ來ルヲ見テ城ヲ捨テ逃去ル、夫ヨリ池田ノ城モ敵ノ旗ヲ見テ逃去ル、孝高北ルヲ逐テ植田郷ニ入り、其地勢ヲ見分アツテ早々引上ゲ、路次スガラ少々放火シ

いし

牟禮高松ニ還リ玉フ。其時城中ヨリ敵引取ルヲ見テ細川源左衛門尉、前田平右衛門尉二人鐵砲二百挺ツツ出シテ跡ヲ暮ヒ行ト云ヘドモ、敵ハ戰ヲ好マズシテ引取ルニハ勝負ハ決セズシテ歸ル、然ドモ其武ヘンノ心バセ由々シキ故ニ元親稱美アツテ感狀ヲ賜フ。黒田孝高翌日諸將ニ云テ曰ク、當國ノ敵ヲ聞ニハカカシキ者ハナシ。國中ノ瘦城ドモ攻落タリトモ其功ニ立ベカラズ、長曾我部ハ阿州ニ居ルコトナレバ先ヅ阿州ヘ行キ、大和秀長ニ對談シ土佐方ノ兵ヲ攻撃ベシ。阿州ノ敵落居スレバ讃州ノ敵ハ戰ズシテ分散ス。無用ノ所ニ力ヲ竭シ戰ヲナシテモ益ナシト申サレシカバ各々此議ニ同シテ阿波國ヘ赴キ玉フ。元親計謀ヲ廻シ其身ハ阿波ノ大西邑ニ在テ、讃州植田城ヲ築キ池田由良山ニツナギノ城ヲ築キ餌兵ヲ措テ敵ノ大軍ヲ誘引シ、植田ノ城ヲ攻サセ、元親阿州ヨリ神内ノ鯨越ヲシテ兵ヲ出シ軍ヲ分テ間道ヲ廻シ、敵ノ前ヲ躰テ後ヲ襲ヒ夜軍ヲ用テ其隙ニ乘ジ勝ヲ究ベキト計シニ孝高智將ナレバ其謀ヲ察シ、植田ノ城ニ赴ズシテ阿波ノ師ニ加リ玉フコソ由々シクテ、元親モ亦植田ノ城ヲ見分シ玉フハ黒田孝高ナリト聞テ酷ダ歎テ曰ク、備前ノ浮田ハ大兵ヲ揚テ修ベシ。仙石ハ去年引田ノ戰ニ負テ怒ルベシ。兩將ヲ誘入テ植田ノ城ニ迫ラセ、我阿州ヨリ出テ方術ヲナシ、日來修シ得タル軍功ヲ顯シ上方ノ眉目ニセント計シニ思ハザリキ、黒田官兵衛ト云古兵ニ見知レテ我が計ヲ水ニナシヌルコソ本意ナケレト申サレヌト也。

○諸國朝敵蜂起事

カ、ル處ニ、十二月十日、讃岐ヨリ高松三郎頼重早馬ヲ立テ京都へ申ケルへ、「足利ノ一族細川卿律師定禪、去月二十六日當國鷺田庄ニ於テ旗ヲ揚ル處ニ、詫間・香西コレニ與シテ、則三百餘騎ニ及ブ。是ニ依テ、頼重時刻ヲ廻ラサズ、退治セシメシ爲ニ、先ツ矢鳴ノ麓ニ打寄テ國中ノ勢ヲ催ス處ニ、定禪遮テ夜討ヲ致セシ間、頼重等身命ヲ捨テ防戦フト雖モ、屬スル所ノ國勢忽ニ翻テ剩へ御方ヲ射ル間、頼重ガ老父、并ニ一族十四人・郎等三十餘人、其場ニ於テ討死仕畢。一陣遂ニ彼ガ爲ニ破ラレシ後、藤橘兩家・坂東・坂西ノ者共殘ル所ナク定禪ニ屬スル間、其勢日及三千餘騎ニ、近日宇多津ニ於テ兵船ヲ點ジ、備前ノ兒嶋ニ上テ曰ニ京都ニ資上ント仕候。御用心有ヘシ。」ト告申ケル。

史料⑤『平家物語』 水島合戦

平家は讃岐の八島にありながら、山陽道八ヶ国、南海道六ヶ国、都合十四箇国をぞうちとりける。

史料⑥『平家物語』 樋口被討罰

平家は、こぞの冬の比より讃岐国八島の磯を出でて、摂津国難波潟へをしわたり、福原の旧里に居住して、(中略) これは山陽道八ヶ国・南海道六ヶ国、都合十四ヶ国を討ち従へて召さるるところの軍兵なり。十万余騎とぞ聞えし。

史料⑦『日本書紀』 天智天皇六年(六六七)十一月条

是の月に、倭国の高安城・讃吉国の山田郡の屋嶋城・对馬国の金田城を築く

史料⑧『日本書紀』 大化二年(六四六)正月条(大化改新詔)

(前略)其の二に曰はく、初めて京師を修め、畿内国の司・郡司・(略)を置き、(中略)。凡そ畿内は、東は名墾の横河より以来、南は紀伊の兄山より以来(略)、西は赤石の櫛淵より以来、北は近江の狭狭波の合坂山より以来を、畿内国とす。

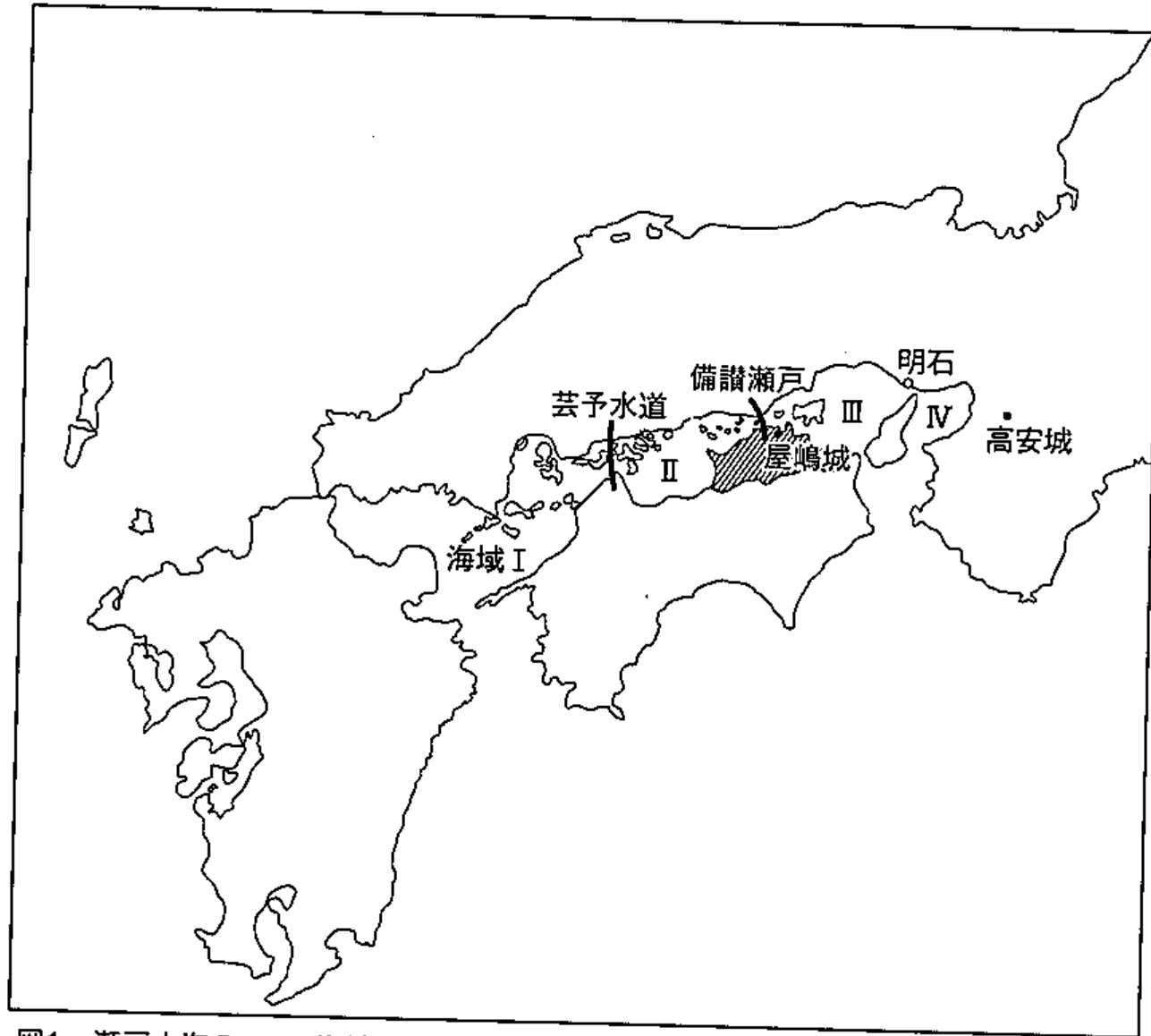


図1 瀬戸内海の4つの海域

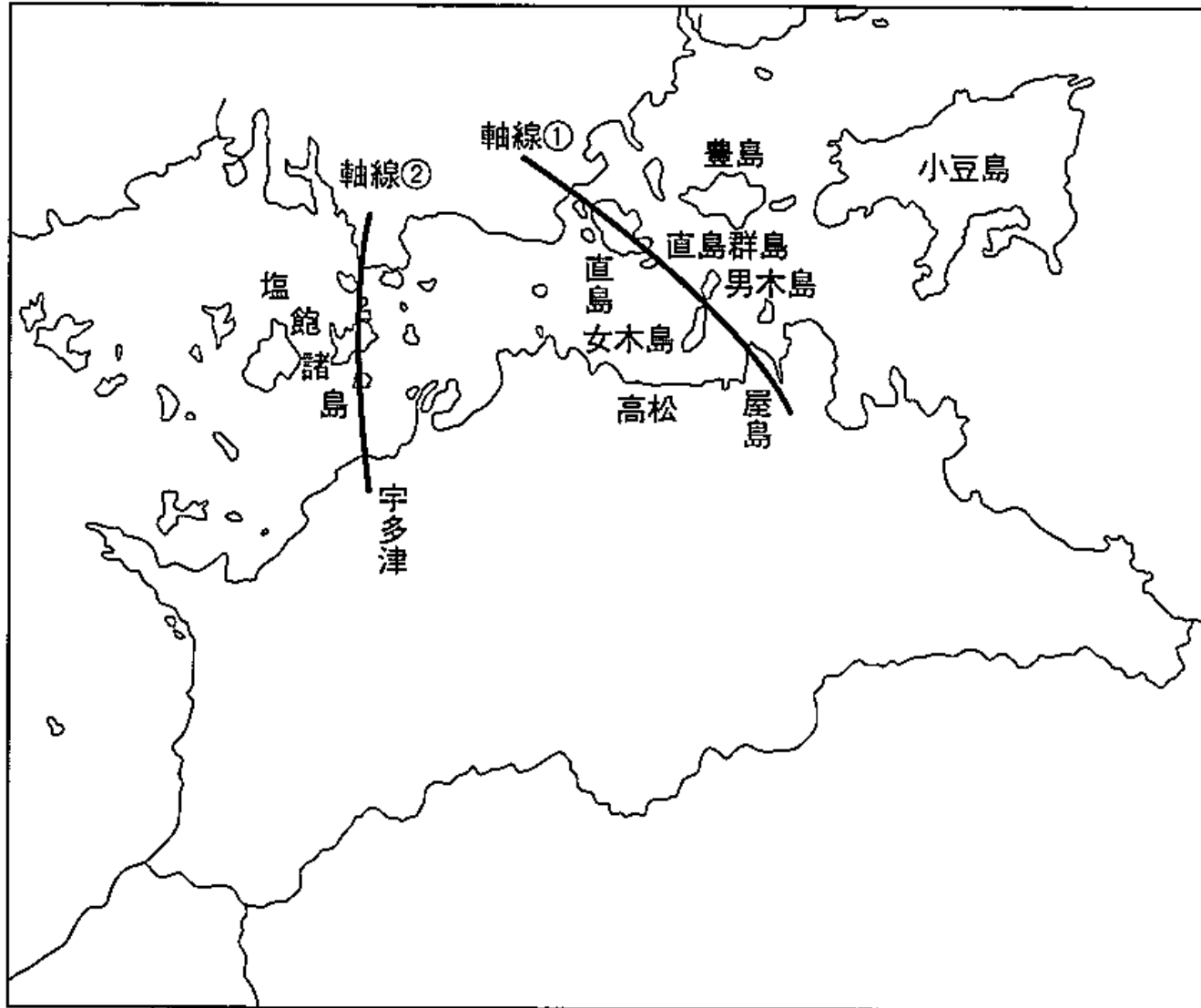


図2 備讃瀬戸の2つの軸線

